

<国際会議に参加して>

PHYSOR2002 に参加して

北海道大学 原子炉システム設計制御工学分野

鈴木 伸英

E-Mail: suzuki@roko.qe.eng.hokudai.ac.jp

10月6日から11日にかけてソウルで行われたPHYSOR2002に行ってまいりました。学生の視点から感想文を書いてほしいと依頼されてしまいましたので、拙い文章ではありますが少々お付き合いいただければ幸いです。

私は国際会議に出席するのでさえ初めてなのに、無謀にも発表をすることになってしまい、9月はその準備にでんてこまいでした。英語が大の苦手な私にとってはまさに地獄のような日々が続きました。OHPシートに何を書けばいいのかさっぱりわからず、書いても「英語がおかしい!」「もっと簡潔に!」と怒られ、自分でわかりやすい発表を心がけて準備しているつもりでも、日本語と英語の言語構造の違いから「OHPの順番がわかりにくい!」と怒られてしまいました。最終的に出来上がったOHPは、英語が苦手な私には摩訶不思議な順番で並べられていました。

発表のための読み上げ原稿も作り、何度か練習もしました。英語が苦手な私は、原稿無しで発表するという事など微塵も考えず、原稿を片手に持って発表することに決めていたので、発表に関しては特に不安ではありませんでした。たとえ頭の中が真っ白になってしまったとしても、手に持っている原稿をベタ読みすればなんとかその場は切り抜けることはできるからです。しかし10月が近づくにつれて、ある不安が私の中に生じたのです。私が今回出席するのは“学会”ではなく“国際会議”なのです。果たして国際会議とはいかなるモノなのか?

国際 + 会議 → 世界中の人が集まる → 国連総会

ということでしょうか?もしかして国連総会のように、体育館のような大きい会場なのではないか、一部屋に300人くらいの人が集まるのではないか、みんな耳に翻訳機を付けているのではないか、そもそもあの翻訳機はどうして耳にくっついているのか、という想像をしてしまい、目前に迫った恐怖に怯えていました。

しかし実際に会場に着いてみると、私が発表する予定の会場は50人ほどしか入らない小さ目の部屋でした。ほっとしました。そしていよいよ発表の順番になってしまいました。最初は緊張して手が震えていたと思うのですが、2、3枚ほどOHPを変えたあたりで緊張も収まりました。緊張も収まり、ようやくペースを掴んだところで、私にとっての大事件が起きました。それは、“OHPを交換してくれる人”が現れたのです。おそらくソウルの学生だと思います。スクリーン真横に立つのが好きな私は、スクリーンと遥か遠くにあるOHPプロジェクタの間をせわしなく動いていました。それを不憚に思われたのでしょうか。それとも「こいつの発表はつまらんから早く終わらせよう」と思われたのでしょうか。いずれにせよ、シート交換の時間を考慮して

20分の発表練習をしてきた私にとってはペースを失う大事件だったのです。そしてOHPを変える時間ロスがなくなるということは質問の時間が増えるということの意味しています。これは大問題です。できるだけゆっくり話して時間稼ぎを試みてみたものの、非常に残念ながら発表はいつもの練習よりも2分程度も早く終わってしまい、そして恐怖の質問タイムがやってきてしまいました。予想される質問とその回答はあらかじめ考えてありましたが、残念ながら一つも当たりませんでした。4つほど質問を受けたのですが、一つも答えることができませんでした。最低でも一つは自分で答える、という目標を定めていたのですが、その目標を達成することはできませんでした。やはり英語の聞き取りができませんでした。質問に答えることもできず、ただただスクリーンの前でぼつんと立ち尽くすことしかできず、本当に悔しい思いをしました。

また、会場では韓国の電力会社や重工会社が、ポスターや模型を展示していました。少しだけですがおしゃべりもしましたし、最先端の炉心解析装置も見せてもらえたり、ペンや巻尺ももらったので、会場の中で一番のお気に入りの場所になりました。毎日通ってしまいました。

今回の国際会議で一番感じたことは、やはり英語ができなくてはいけないということでした。質問に一つも答えられなかったということもありますが、周りで楽しそうにお話ししているのに、自分だけ仲間に入れないことが本当に残念でした。英語を話すことができれば、いろいろな人と知り合えたでしょうし、もっといろいろな情報を吸収できただろうと思います。

さて、発表も終わったことですし、せっかくソウルに来たわけですからおいしいものを食べなくてははいけません。ということで屋台に入ってみました。そこで食べたのは“トッポッキ”という、お餅をいかにも辛そうなタレで炒めたものでした。韓国の若い女性に大人気！と言われているものなので、「いかにも辛そうだがきっと見た目ほど辛くないはず」という楽観的な考えで食べてみました。結果、私はおなかが痛くなりました。もともと辛いのは得意でない私にとってはそのくらい辛かったのです。初めはおいしくいただくことができたのですが…。別の日には牛のスネの骨を煮込んだものを食べました。スープの方を飲むのではなく、骨の方を辛いタレに付けて食べるのです。ぷるぷるのゼリーのような食感で、一年分のコラーゲンをたった一食で摂取してしまったと思われそうです。初めての味に感動しました。しかしながら韓国料理は基本的に辛いものが多かったので、しばらく辛いものは遠慮しておきます。

初めての国際会議は、私にとって本当に良い経験になりました。憧れの“耳に翻訳機”にはお目にかかれませんでした。翻訳機に頼ることなくコミュニケーションを取れるようにならなくてははいけない、と思えるようになっただけでも私にとっては大収穫だったと思います。これからは英語をしっかりと勉強し、世界中に知り合いができるようになりたいです。最後までお付き合いくださいましてありがとうございました。